

日本ヘーゲル学会

第 36 回研究大会

2025 年 6 月 7 日（土）・8 日（日）

ハイブリッド開催

会場：成城大学 成城キャンパス

7 号館 2 階・723 教室



要事前申し込み

* 出席の方は QR コードあるいは以下のアドレスより必ず事前申し込みをお願いします。

※切：5/31（土） <https://forms.gle/LXgnxgQy7K2qJZ638>

QR コードがうまくいかない場合は下記下田までメールでご連絡ください。

* オンライン参加方法については別添のオンライン大会マニュアルをご参照ください。

開催校責任者：下田和宣（成城大学）

〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

Tel 03-3482-9515（下田研究室） Email: kazushimoda@seijo.ac.jp



日本ヘーゲル学会事務局

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1 東京女子大学現代教養学部人文学科哲学専攻 山田有希子

Tel: 03-5382-6324 | E-Mail: hegel-jimukk@hegel.jp | 学会 HP : <http://hegel.jp>

郵便振替口座: 00150-1-10718 日本ヘーゲル学会

【開催会場】

(1) 個人研究発表・シンポジウム・合評会・講演・総会：

723 教室

(2) 会員控室：

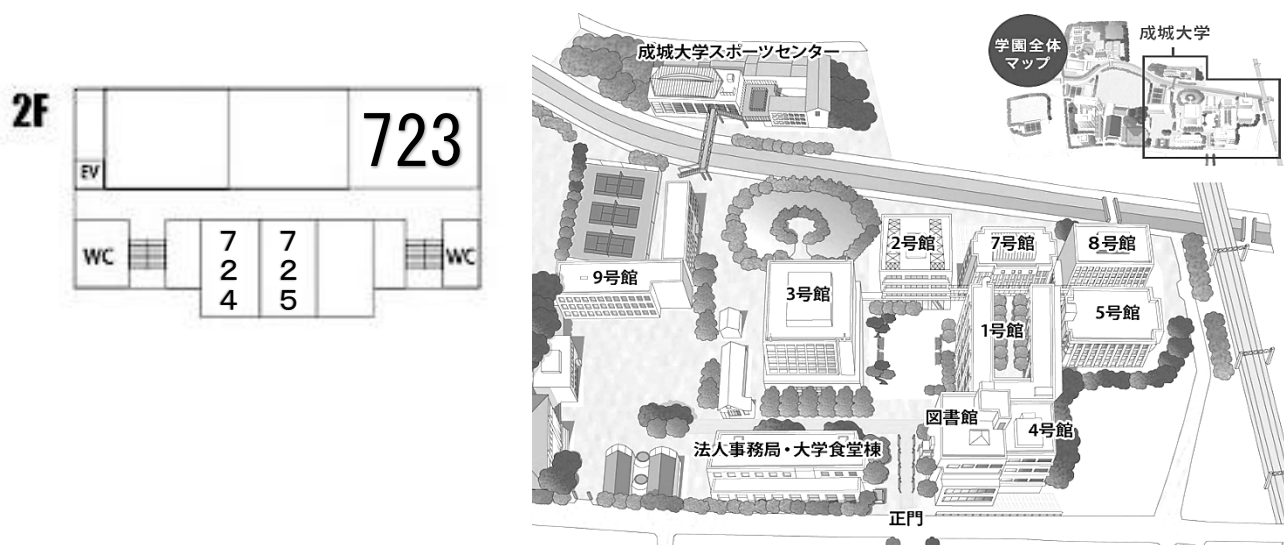
724 教室

(3) 事務局控室：

725 教室

(3) 懇親会

法人事務局・大学食堂棟 1 階 学生食堂



■大会会場（7号館）正門から入り、突き当たりの右側の建物です。

■昼食について

・学食：土日は営業していません。

・駅周辺：飲食店のほか「成城石井」、駅付設の「成城コルティ」でお弁当が買えます。

■懇親会（6/7（土）大会終了後）

会場：法人事務局・大学食堂棟 1 階の学生食堂で行います。

* 懇親会参加ご希望の方は、かならず事前登録/事前振込をお願いいたします。

会費： 一般: 3,000 円 学生: 2,000 円

振込口座 ゆうちょ銀行 14420-19260791 シモダカズノブ

（他金融機関からの振込の場合）

ゆうちょ銀行（9900） 店名：四四八（ヨンヨンハチ）普通預金 1926079

* 大会へのオンライン参加は、学会 HP 上「第 36 回研究大会特設サイト」からのご案内となります。パスワードが必要です。詳細は「オンライン大会マニュアル」を併せてご覧ください。マニュアルは HP 上でも随時更新予定です。

【プログラム】6月7日（土）7号館2階723教室

- 10時30分～11時10分：個人研究発表（1）

読むことによる意味の解放 ジャン・イポリットのヘーゲル解釈の方法と内容について

発表：客本敦成（大阪大学）

司会：大河内泰樹（京都大学）

- 11時15分～11時55分：個人研究発表（2）

ヘーゲル「芸術講義」における原理としての美と象徴：芸術の概念をめぐって

発表：岩田健佑（シュトゥットガルト州立造形芸術アカデミー）

司会：石川伊織（新潟大学）

休憩（12時00分～13時00分）

- 13時00分～13時45分：総会

- 13時45分～13時55分：研究奨励賞授与式

- 14時00分～17時00分：シンポジウム

ヘーゲル美学 200 年 歴史・自然・文明

提題者：小川真人（東京工芸大学）「ヘーゲル美学と色彩論

——ヘーゲル芸術哲学講義における自然哲学的基礎——」

喜屋武盛也（沖縄県立芸術大学）「美術史学とヘーゲル美学」

吉岡 洋（京都芸術大学）「〈終わり〉をめぐって——ヘーゲル美学からみた現代」

司会：山田忠彰（日本女子大学）

- 17時30分～19時30分：懇親会 （法人事務局・大学食堂棟1階・学生食堂）

【プログラム】6月8日（日）7号館2階723教室

- 10時00分～10時40分：個人研究発表（3）

ヘーゲルと近代の発生学

発表：栗原 隆（新潟大学）

司会：三重野清顕（東洋大学）

- 10時45分～12時15分：特別講演

伊坂 青司（神奈川大学）

ヘーゲルの神話論とインド理解

ーフリードリヒ・シュレーゲル評価の転換に関連してー

司会：後藤正英（佐賀大学）

休憩（12時15分～13時05分）

- 13時05分～16時00分：合評会

飯泉佑介『意識と〈我々〉——歴史の中で生成するヘーゲル『精神現象学』』（知泉書館、2024年）

自著紹介：飯泉佑介（福岡大学）

評者： 田端信廣（同志社大学）

久富峻介（京都大学）

吉田 達（中央大学）

司会： 山田有希子（東京女子大学）

【要旨】

【個人研究発表1】

読むことによる意味の解放 ジャン・イポリットのヘーゲル解釈の方法と内容について

客本敦成（大阪大学）

本発表はフランスの哲学者・哲学史研究者であるジャン・イポリット（Jean Hyppolite）のヘーゲル解釈の方法と内容を明らかにしようとするものである。

イポリットはアレクサンドル・コジェーヴと並び、20 世紀フランスの代表的なヘーゲル研究者として知られる。特に主著『論理と実存 ヘーゲル論理学試論』（1953 年。以下『論理と実存』）は、コジェーヴの人間主義的ヘーゲル読解と鋭く対立するヘーゲル読解を提出した研究書として、重要である。その一方で、イポリット自身のヘーゲル読解の内容そのものについては、先行研究の多くがコジェーヴとの対立やハイデガーからの影響を指摘するものにとどまっており、内在的な検討に関しては、いまだ課題が残る。こうした先行研究の状況を踏まえ、本発表では『論理と実存』におけるイポリットのヘーゲル解釈を検討し、解釈内容の独自性と、解釈を規定している方法論的機制を明らかにする。

本発表は次のような三節構成を採る。まず第一節では『論理と実存』第一部を検討し、イポリットが〈存在・反省・意味〉という三要素からなる独自の言語理論を提示していることを示す。イポリットによれば、言語は人間の自我に先立って既に存在しており、人間は言語の外部で思考をおこなうことはできない。しかし弁証法的思考はこれを出発点としたうえで、普遍的な「意味」（sens）を人間にもたらす。このアイデアはイポリットのヘーゲル解釈の方法論として、『論理と実存』全体の記述を規定している。

第二節と第三節では、この方法論がもたらしているヘーゲル解釈を示す。第二節では『論理と実存』第二部およびイポリットによる『精神現象学』の仏訳に付された訳注を検討し、イポリットが『精神現象学』理性章冒頭に見出している「意味」を示す。「観念論」から経験的な「観察」へと移行するこの箇所の記述に対して、イポリットは「観察」がルネサンス期の思想に対応すると指摘することで、カント的な「観念論」を批判する位置にある「観察」が、歴史的にはカント哲学の発生に先立って実存していると指摘する。

第三節では『論理と実存』第三部における『論理学』と詩の類比関係の指摘を検討し、イポリットが『論理学』という著作そのものを、「意味」の明示化が行われる場所の一つとして解釈していることを示す。イポリットによれば、詩の対象である詩情が詩の文言を暗黙的に包摂するように、『論理学』の対象である「絶対的形式」は、『論理学』の文言を包摂する。『論理学』を読むとは、『論理学』に潜在する意味を明示化する経験である。

最後に本発表は〈イポリットのヘーゲル解釈の方法とは、ヘーゲルのテキストにおいて潜在的なままに留まっているヘーゲルの記述の「意味」を、ヘーゲルのテキストを読むことを通じて明示化するものである〉と結論する。

【個人研究発表2】

ヘーゲル「芸術講義」における原理としての美と象徴：芸術の概念をめぐって

岩田健佑（シュトゥットガルト州立造形芸術アカデミー）

ヘーゲルがハイデルベルクおよびベルリンで開講した「芸術哲学講義」においては、つねに美がその論及の対象として宣言され、美の基準が述べられている。しかし、ヘーゲルの実際の議論においては、美の基準を満たしているとは言い難い対象が数多く取り扱われている。イエシュケは、そうした「芸術哲学講義」の構成そのものに疑義を呈し、ヘーゲルは美について述べる代わりに、芸術の概念を定義すべきだったと述べた（Jaeschke, 2016）。

そうした批判を受け、いくつかの研究においては、美以外の、より根本的な原理を芸術哲学において発見することが試みられている。その中でも、ファリーナやハースは、象徴概念をヘーゲル芸術哲学の根本原理であると解釈する（Farina, 2015, Haas, 2013）。この解釈は、ハイデルベルクからベルリンにかけてのヘーゲル芸術哲学の発展史的観点や、主観的精神の哲学を合理的に説明できるという利点を有しており、説得的であるが、しかし芸術哲学における諸芸術形式の関係や、芸術とそれ以外の対象との区別を説明しづらくなるという難点を有している。

それに対して、ペータースは、美に芸術哲学全体を規範的に統括する原理として再度重要性を付与する（Peters, 2015）。この説明は上述の問題を解決できるものの、ペータース自身による、近代の芸術は全て美の範疇で説明可能であるという解釈は疑問の残るものである。

本発表は、この両者の問題点を踏まえ、ヘーゲル芸術哲学における芸術の概念をより整合的に規定することを目指す。その際注目するのは、ヒルマーの指摘する、一八二八／二九年講義における、作品概念の変化である（Hilmer, 1997）。ヒルマーによれば、この最後の講義において、ヘーゲルは作品の有機的統一を美として説明する方針を部分的に放棄し、歴史的に実現される芸術作品の成立過程にその議論を移したのであるという。本発表は、こうした講義における論点の変化と、『哲学的諸学のエンツュクロペディー』第三版における変更を踏まえ、ヘーゲルの芸術観が、作品内部の統一としての美から、作品に関する芸術家や観衆の実践的な関係を統一的に理解することへと拡張していることが示される。この拡張を前提とすることによって、上述した二つの立場を整合的に理解することが可能になるのである。

【個人研究発表3】

ヘーゲルと近代の発生学

栗原 隆（新潟大学）

ヘーゲルの『自然哲学』、344 節の本文に「個別的な個体の形態形成と再生産の過程は、このように、類の過程と一致する」(GW.XX,S.348) とある。訳者の加藤教授によって、「個体形成と類形成の同一性は普通ヘッケルの説 (1872 年) と言われる」(岩波書店『自然哲学 (下)』484 頁) と注記されているように、その発想は、Ernst Heinrich Philipp August Haeckel (1834 - 1919) に帰せられるのが常である。ヘッケルは、フォン・ベア (Karl Ernst von Baer : 1792 - 1876) がその著『Über Entwicklungsgeschichte der Thiere, Erster Theil.』(1828 年) で語った「動物の発展のあらゆる形式と段階を経て、個々の関係すべてを支配する根本思想」(S.263f.) を完成させたと見定められている。「個体の展開の歴史は、どんな関係においても生育する個体性の歴史である」(S.263)。しかし実に『ハイデルベルク・エンツュクロペディ』(1817 年) の 268 節でもヘーゲルは、「個々の個体の形態形成と再生産との過程は、このように類の過程と一致する」(GW.XIII,S.158) と論じているのである。

『自然哲学』339 節の補論には、「生命的なものの産出は一般にカオス、そこにおいて植物的生命と動物的生命、有機的なものと非有機的なものが一つの統一の内に存在していたカオスからの革命として表示される」(SW.IX,S.349) という行文があり、ここにペトリ (Petry) は、次のような注解を付している。「生物の発生の説明として『カオスからの革命』を拒絶することによってヘーゲルは、C.F.Wolff (1733 - 1794) の『発生論』(Halle,1759) によって唱道された後成説を断固として拒絶している。後成説によれば、生殖の過程において、胚は単に開展 (develop) されるだけではなく、継続的な成長によってもたらされるという」(Philosophie Of Nature.Vol.III,p.229)。加えて、「発生学の分野で、19 世紀の最初の 10 年で、Meckel、Doelinger、Pander、von Baer らによって成し遂げられた重大な進捗に、ヘーゲルが気付いていた証拠はない」(p.229) とまで、言い切っている。

本発表は、この見解を批判的に分析することを目指す。例えば、シュルツェの『心理的人間学』(3 版 : 1826 年) で、フォン・ベアの『Vorlesungen über Anthropologie』(Erster Theil : 1824 年) の 229 頁以下が参照されている。フォン・ベアはこの著でも、「新たな個人の展開の歴史と先行する創造の歴史」(S.489) について語っている。つまり、前成説と後成説との論争に連なる問題設定である。フォン・ベアには、卵子の発見を報告した『哺乳類の卵子と人間の起源について (De Ovi mammalium et hominis genesi) .』(1827 年) において、前成説を完全に否定し去った業績もある。

もとよりヴォルフは『発生論』で、ハラーやシャルル・ボネの前成説を徹底的に批判していた。ボネの『Betrachtung über die Natur』(1776 年) には、「この小さなカオスは、あらゆるものが有機的かつ対称的に含まれている世界である」(S.147) というような章句がある。ボネは、チュービンゲンで「奇跡」について授業された際の典拠で、これに反発したヘーゲルは、『初期神学論集』での断章「奇跡」(GW.I,S409-410) でボネをあてこすってもいた。自らボネの『心の力についての分析的試論』(1770 年) を所蔵していたと伝えられてもいる (Vgl.GW.XX,S.668)。前成説を唱道したボネが、実に個体発生と系統発生との輻輳を語っていたという科学史のダイナミズムの綾を剔抉するとともに、Flanz Joseph Schelver の『Elementarlehre der organischen Natur. Erster Theil』(1800)、Autenrieth の『Handbuch der empirischen menschlichen Physiologie. Dritter Theil』(1802)、Ignaz Döllinger の『Grundriß der Naturlehre des menschlichen Organismus』(1805)、Lorenz Oken の『Beiträge zur vergleichenden Zoologie. 2 Heft』(1807)、Friedrich Tiedemann の『Anatomie und Naturgeschichte der Vögel..』(1810)などと、ヘーゲルの所論とを、比較検証しつつ、立論する。

【シンポジウム】

「ヘーゲル美学 200 年 歴史・自然・文明」

【趣意説明】

ヘーゲル美学 200 年というタイミングに何がいかに語られるべきか。

ヘーゲルが美学（芸術哲学）講義をおこない、死後弟子が編集刊行したことは知られていても、いまその研究関心は必ずしも高くない。一昨年逝去された故フルダ教授(Hans Friedrich Fulda, 1930-2023)は美学などの「講義」の資料は「重要な価値を有する」としながらも、「哲学的認識を得るためにはこの資料は著作そのものに比べてあまりにも貧しい。さらに芸術の哲学・宗教哲学・哲学史についての諸講義はヘーゲルのものではあるが、従属的な試みのものと評価されねばならない」（『ヘーゲル 生涯と著作』海老沢善一訳、313 頁）という。この見方に首肯するヘーゲル哲学研究者は少なくないだろう。

そもそも、ヘーゲル美学の「テキスト」とは何か。ヘーゲルの死後に講義が編集され世に出た「美学」は、弟子ホトーの不適切な改竄が物議を醸してきた。「理念の感性的映現」としての「美」という部分は、聴講者筆記録のどれにも確認されないで、ホトーの挿入という推測が受けいれられている（イエシュケ『ヘーゲル ハンドブック』神山伸弘・久保陽一・座小田豊・島崎 隆・高山 守・山口誠一監訳、p.528）。ヘーゲル美学の「テキスト」問題は、自筆講義草稿の極端な僅少さから聴講者筆記録を「テキスト」とせざるをえない状況にある。聴講者筆記録作成者としてのホトーは、「世界史の哲学」講義では、「「講義のもともとの姿にもっとも近い」と判断される」（伊坂青司訳『世界史の哲学講義 ベルリン 1822/23 年』下巻、「訳者解説」p.332）仕事をした人物でもあった。その信頼度は小さくない。

他方でこのところ、ヘーゲル美学に関する資料が次々に刊行されている。ヘーゲル美学の資料、つまり「芸術哲学講義」資料は、『エンチクロペディ』「芸術」項目のほか、ヘーゲル自筆の講義草稿が断簡のみ、わずかしが残存せず、それが他のテーマの講義資料状況との違いといえる。しかし、ヘーゲル美学の自筆草稿資料の僅少を補完しうるものとして、芸術哲学講義の各年度の聴講者筆記録が注目され、「芸術哲学講義」各年度聴講者筆記録としてドイツで単行本出版され、最近、これらがいわゆる大全集(GW)第 28 巻としてまとめなおされ出版された。つまり、2015 年には 1820・21 年冬学期講義と 1823 年夏学期講義が第一分冊 GW28-1 として、2018 年には 1826 年夏学期講義が第二分冊 GW28-2、2020 年には 1828・29 年冬学期講義が第三分冊 GW28-3 として出版された。各年度の聴講者筆記録が大全集の批判的テキストとして出そろったことになる。さらに最新の状況として 2023 年には、以上第 28 巻三分冊にかんする「編者報告」(Editorische Berichte)および「付録」(Anhang)が第四分冊 GW28-4 としてでた。さらに、報道によれば、ハイデルベルク時代ヘーゲルの「美学」講義の聴講者筆記録が最近明るみに出た(“Manuscript treasure trove may offer fresh understanding of Hegel” [in: The Guardian, 29. Nov. 2022])。いま、われわれはヘーゲル美学をアカデミックに論議する新たなプラットフォームを獲得しつつある。

この状況は、ヘーゲル美学とは何であり、それがいまどのような意義を有するかを問い直す新たなチャンスでもある。本シンポジウムはこの機会をとらえつつ、ヘーゲル美学のアクチュアリティについて考えてみたい。あらたな研究状況からヘーゲル美学をみつめなおすとともに、ヘーゲル美学以降に発展を遂げた近代的な大学制度での美学または芸術学のありかたを、ひろく議論する機会をもちたいとおもう。

【提題 1】ヘーゲル美学と色彩論—ヘーゲル芸術哲学講義における自然哲学的基礎—

小川真人（東京工芸大学）

ヘーゲル美学【の】色彩論とタイトルを決めたなら、話はわかりやすいかもしれない。ヘーゲル美学すなわち芸術哲学講義の「絵画」章には、かなりの分量で色彩に関する考察がある。「画家を画家たらしめるもののはなによりもまず色彩 Farbe や色調 Colorit である」(GW28-1, S.175)と言明するように、ヘーゲル絵画論の色彩への関心は大きい。そのなかでヘーゲルは18世紀フランス百科全書派のディドロ(Denis Diderot, 1713-84)の『絵画論』(“Essai sur la peinture” 1765)を挙げ(GW28-1, S.176)、「人間の体の色調」要するに肌色が、“Das Allerschwerste”(いちばん難しいところ)だという、ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)がドイツ語訳したディドロの言葉をヘーゲルは参照する(Ebd.)。このようなヘーゲル美学【の】色彩論は、ほかでもなくヘーゲルの芸術論の重要論点であり、学会発表や論文執筆のテーマ設定にはふさわしい。

しかし、本提題はヘーゲル美学【と】色彩論と考えた。ヘーゲルのディドロ『絵画論』言及の背後に、これを激賞しそのドイツ語翻訳さくわだてた文豪ゲーテとその色彩論研究があることは、大全集 GW 版編者の詳細きわまる註記(GW28-4, S.1327f.)を俟つまでもない。ゲーテの色彩論はまったく自然科学研究的に構築されたものであり、詩人とは別の彼の顔がある。ヘーゲル美学【と】色彩論とは、ゲーテの色彩論研究に触発されていたヘーゲルのおこなった美学を考えることと言いかえられる。

ゲーテ色彩論にヘーゲル自身が関心をもち論考をつみかさねた経緯に関しては、栗原隆「色と心 ヘーゲルによるゲーテの『色彩論』の受容をめぐる」(シェリング年報第 27 巻 pp.81-92)に最新研究動向をふまえた考察がある。ヘーゲルの色彩論への言及が当初は「自然哲学」でだったが、その後「精神哲学」で詳細に考察され、そして「美学」での言及に至ったという経過は示唆に富む。このヘーゲルの推移は、ゲーテにおいて客観的自然現象としての色の科学的物理的考察ではじまりながら(cf. J.W.v.Goethe Beiträge zur Optik [in: Die Schriften zur Naturwissenschaft [Leopoldina(=LA)], Verlag Hermann Boehlaus Nachfolger Weimar, Abt.1, Bd.8, S.226-7)、やがて色の主観的で感覚的な面(「生理的色彩」J.W.v.Goethe: Zur Farbenlehre, Didaktischer Teil, LA Abt. I. Band 4.)を重視するに至った経過と比較可能だからである。さらにいえば、ヘーゲル美学と【ゲーテ】色彩論との連携という論点は、色というものが、客観的事象だけでは語り尽くし得ない、人間の目で感覚される主観性の面も本質構成要素とするものであり、むしろその双方の交互作用にこそ色の究明の糸口があるという両者の考えの共有があってこそその話である。カント『判断力批判』の受容と所謂「直観的悟性」の人間的可能性問題に端を発したとするゲーテ色彩論の哲学的背景の掘り起こしは、エックハート・フェルスター『哲学の 25 年』(三重野清顕、佐々木雄大、池松辰男、岡崎秀二郎、岩田健佑訳)が包括的な哲学史的検証をともしつつおこなっている。この主題は、かつてレーヴィット(Karl Löwith, 1897-1973)が仙台で書いた著書『ヘーゲルからニーチェへ』“Von Hegel zu Nietzsche”1941「序章」で丹念に論じた主題でもあった。

今回は色彩論だけでなく美学のシンポジウムであり、その限りで本提題は、自然哲学の領域で積み重ねられた考察が、ヘーゲル美学の芸術論の基礎にいかされ、200 年の時を超えて、今もなお無視できない説得性に貢献してることに光をあてたいと思う。

【提題2】美術史学とヘーゲル美学

喜屋武盛也(沖縄県立芸術大学)

ヘーゲルが美学を講じた 19 世紀の前半には美術史学が未だ存在していなかった、という前提から議論を展開したい。とはいえ、ヘーゲルに先駆するヴァザーリやヴィンケルマンの業績が現代美術史学に連なることを否定するものではない。より厳密に述べるならば、ヘーゲルの時代に欠如していたのは、特定の歴史観と方法論に基づく近代的美術史学の体系であり、それは 19 世紀後半において特定の課題意識のもとに構築されたものである。

そこで問うべきは、ヘーゲルの時代に不在だった「美術史学」の本質である。それはブルクハルトに始まり、「イタリア・ルネサンス」を近代の端緒と位置づける歴史観に基づく美術史学である。ヴェルフリンの『ルネサンスとバロック』やヴァールブルクの「古典古代の残存」という研究プログラムも「ルネサンス的近代」を基点とする視座を共有し、そのうえでバロック様式への展開や古代・中世からの伝統の継承と変容を分析するものであった。この美術史学パラダイムにおいては、ルネサンスを経ることが近代美術史の正統的發展経路とされ、その軌道から外れる地域や文化圏は周縁化された。後の「北方ルネサンス」「ドイツ・ルネサンス」「12 世紀ルネサンス」などの概念の出現は、近代美術史における主体的地位を獲得するためにはルネサンスを経過することが不可欠であるという認識の表れと解釈できる。

対照的に、ヘーゲルの視座では、宗教改革こそが文化的近代を画する決定的契機であった。宗教哲学的基礎の上に提示された芸術形式論において「ロマン的形式」として一貫した規定がおこなわれたキリスト教芸術が、宗教改革を経ることで哲学的反省的傾向（ないし世俗的人間主義的傾向）を強めたものへと転化する。ヘーゲル以降に体系化された美術史学は原則的にこの視点を採用せず、ルネサンスと宗教改革の緊張関係が両者の近代像の本質的差異として顕在化したと言えよう。

19 世紀後半に確立した美術史学は、実証的作品研究の深化とともに発展したが、理論的・思想的反省も継続的に行われてきた。20 世紀末のニュー・アートヒストリーは精神分析学やジェンダー理論を援用して美術史学の方法論的刷新を試み、近年のグローバル・アートヒストリーは西洋中心主義的特権化への批判的視座を得ようとする模索であると言えよう。

このような理論的再考を経た現代美術史学にとって、近年の講義録研究がディティールを含め明らかにしようとするヘーゲル美学はいかなる意義を持つのか。それは美術史学によって克服され乗り越えられた過去として容易に閑却すべきものではなく、「美術史以前」もしくは「ルネサンスなき美術史」の思想的可能性を示唆する点において美術史学のパラダイムを相対化し、学問のグローバル化と脱中心化という現代的課題の解決に資するものと考えられる。

【提題3】〈終わり〉をめぐる——ヘーゲル美学からみた現代

吉岡 洋（京都芸術大学）

〈終わり〉という観念に、私たちは取り憑かれている。あるいは〈終わらない終わり〉の中を、私たちは彷徨い続けている、と言ってもいい。永遠に回帰する運命から目を背けて、一度かぎりの人生、限りある資源としての地球を（技術的に）最適化することにしか、目標を見出すことができない。だが、Einmal ist keinmal. 一度しか起こらないことは、一度も起こらないのと同じなのだ。これが、ミラン・クンデラの有名な作品名「存在の耐えられない軽さ」が言い表している現実である。

21 世紀もすでに四半世紀を過ぎた今、〈終わり〉はどのように思い描かれているか？ それは気候変動やパンデミック、第三次世界大戦の予感、資本主義自体の終焉、技術的シンギュラリティ、生成 AI による人類そのものの代替、といった空想の形で表れている。カナダの評論家ナオミ・クラインは、彼女が「終末ファシズム（"end times fascism"）と呼ぶものについて論じている。トランプ政権と結びついた保守層とシリコンバレーのテクノエリートたちが、更新された終末論（核戦争や環境カタストロフ）と救済（地下シェルターや海上都市、火星への移住）の教義によって、イデオロギー的に結びついていると言うのである。メディア学者のダグラス・ラシュコフもまた近著『最富裕者生存——テクノ億万長者たちの逃避空想』において、アップデートされた終末論の背後にある「マインドセット」について語っている。

私が本発表で試みたいのは、こうした状況を 200 年前のヘーゲル美学における芸術の〈終わり〉という視座から再検討してみることである。考察は二段階に分かれる。まず前段においては、ヘーゲルのいわゆる「芸術終焉論」とその背景となる歴史哲学がその後どのように継承されていったかを整理する。ヘーゲルを現代思想に橋渡ししたアレクサンドル・コジェーヴによる『精神現象学』解釈、現代アートの存在基盤とも言える「アートワールド」の概念を作り出したアーサー・ダントーのヘーゲル理解、そして冷戦終結後の世界を歴史の〈終わり〉として描き出したフランシス・フクヤマの政治哲学を整理し、位置付ける。それらを踏まえて後段では、〈終わり〉というファンタジーを際限なく生み出す現代精神のあり方を、ヘーゲル哲学から逆照射することを試みたい。

【特別講演】

伊坂 青司「ヘーゲルの神話論とインド理解

ーフリードリヒ・シュレーゲル評価の転換に関連してー

「新しい神話」の理念を先駆的に打ち出したドイツ初期ロマン派のフリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829 年）は、逸早くオリエントのインド神話に目を向けた。シュレーゲルと同世代のヘーゲルもまた初期から神話に関心を抱き、ギリシア神話に依拠して当初はシュレーゲルのオリエンタリズムを批判していた。しかしその後、シュレーゲルの『インド人の言語と英知について』（1808 年）に触発されてインド神話について理解を深め、それに伴ってシュレーゲルに対する評価も大きく転換することになる。そこでシュレーゲル評価の転換と関連づけて、ヘーゲルのインド理解の進展を考察することにした。

シュレーゲルは、論文「ポエジーについての会話」（『アテネウム』1800 年）の「神話についての議論」において、「新しい神話」をロマン的「ポエジー」と一体のものとして「空想」と結び付け、「新しい神話」の源泉をインドに求めた。一方ヘーゲルは、イェーナ初期の「一般哲学概説」講義（1803 年）で「神話」を論じることになる（GW 5,374-377）。ヘーゲルがそこで神話を「自然」から形成されたものとし、また神話の「芸術作品」を民族の「普遍的な財産」とするもの、「新しい神話」を「人為的なもの」とし、芸術作品を単数の「天才」の創作によるものとするシュレーゲルを意識してのことである。草稿「哲学の体系について」（GW 5.468-472）で、「無限なもの」を「空想」に求める「オリエンタリズム」を批判するのも、シュレーゲルのインド志向を念頭に置いてのことである。

シュレーゲルはその後 1802 年からパリでサンスクリット語を習得し、公刊した『インド人の言語と英知について』で、サンスクリット語を祖語とするインド＝ヨーロッパ語族やインド神話を論じることになる。ヘーゲルはその後ベルリン大学「世界史の哲学」講義（1822/23 年）の「オリエント世界」において、インドを「空想の国」とする一方で、「知恵や学問や教養」の起源をインドに求めている。このようにインド理解が進展したのは、シュレーゲルの『インド人の言語と英知について』とその中に付された「バガヴァッド・ギーター〔神の詩〕」のドイツ語訳から受けたインパクトによる。こうしてヘーゲルはシュレーゲルの論述を踏まえて、インド神話を「ブラフマン」の「普遍的な汎神論」と特徴づけ、またサンスクリット語を「祖語」としてヨーロッパ諸言語と関連づけるのである。

さらにヘーゲルは「フンボルト書評」（1827 年）において、「バガヴァッド・ギーター」の主題をなす「ヨーガ」に注目し、その最高段階の「涅槃」にブラフマンとの一体化を見ている。そこでブラフマンの汎神論の抽象性を指摘する一方で、そのブラフマンがヒンドゥー教のブラフマー・ヴィシュヌ・シヴァの三神一体（トリムルティ）となることに、キリスト教の三位一体論との関連を見ようとしている。そしてヘーゲルは最後の「世界史の哲学」講義（1830/31 年）序論において、インド＝ヨーロッパ語族論を二十数年前の歴史上の「大発見」とすることで、『インド人の言語と英知について』がシュレーゲル評価の転換の機縁になったことを告白したのである。

【合評会：飯泉佑介『意識と〈我々〉——歴史の中で生成するヘーゲル『精神現象学』】
（知泉書館、2024年）】 自著紹介

本書は、G. W. F. ヘーゲルの『精神現象学』（1807年）を、「学」としての哲学の歴史的生成を叙述し正当化する企てとして解釈し、その哲学的射程を明らかにする書である。

今日、『精神現象学』がヘーゲルの主著の一つであり、もっとも世に知られた著作となっていることを否定する者はいない。しかし、この大著をどのように読み解くか、言い換えれば、いかなる哲学的著作として理解するかという点については、今なお百家争鳴の状態にある。国内外の名だたる哲学者や研究者が各々の目論見のもとで新基軸の『精神現象学』像を打ち出している時流を鑑みるならば、本書は、ある意味では『精神現象学』読解の基本中の基本に立ち返ったにすぎない。それは、①ヘーゲル自身の説明と叙述に基づいてテキストを内在的に読み切ること、そして、②歴史を背負った同時代の状況の中にテキストを位置付けることである。

このことは、どの哲学書にも通用する一般的な「あるべき」研究姿勢を表しているだけのようと思われる。だが、そうではない。なぜなら、ヘーゲルにとって『精神現象学』は、①「学」と称される哲学体系の一部門であるかぎり、内在的に一貫した仕方で構成されていなければならないが、また、②「学」が古代から近代に至るヨーロッパの思想と文化の総体を含み、その歴史的帰結として正当化されるべきものであるかぎり、歴史的な時代状況と接していなければならないからである。それにもかかわらず、同書の章立ての複雑さや成立経緯の不明瞭さから——とりわけ本邦の研究において——①の側面は等閑視され、②の側面は細分化されたコンステラツィオン研究や影響作用史研究のうちに解体されてきたと思われる。対して本書は、二つの側面に両睨みを利かせつつ、一貫して『精神現象学』の方法論と理論構成論、さらにその背景となる思想形成史を解釈しようとした点に特徴がある。

もっとも、①の側面と②の側面は決して容易に統合せられるものではない。というのも、両者の統合とは、〈哲学成立以前の特殊な歴史的状況において、普遍的な哲学の生成を叙述し、その生成に即して当の哲学を正当化する〉という、原理的に困難な事態を表すものにほかならないからである。この困難は、「我々にとって（für uns）」と表記される叙述上の特性、「意識の諸形式の系列」と「精神の諸形式の系列」の体系的連関、絶対知における「時間の抹消」論など、『精神現象学』研究上の枢要な諸論点に現れているということができる。さらに、『精神現象学』は、それによって「学」が正当化されるや否や、当の「学」の体系から排除されてしまうが、この末路さえもその原理的な構造によって定められていたと考えられるのである。

したがって、このような一風変わった哲学の正当化論を『精神現象学』の根本モチーフと見なすかぎり、同書に「失敗作」の評価を下すことは避けられないかもしれない。しかし、そうだとした場合、ヘーゲルがその企てを通じて、哲学理論の極地——〈今、ここ〉における絶対的な哲学の成立——を目指したことに変わりはない。『精神現象学』がどれほど難解であり、いかがわしく見えたとしても、私たちは現にそのうちに唯一無二の魅力と不変的なアクチュアリティを見出している。その源泉の一つは、ほかでもない〈哲学の歴史的生成の正当化〉というモチーフにあると、本書は考えている。

【会場校アクセス】

成城大学のアクセス情報はこちらにもあります。 <https://www.seiyo.ac.jp/access/>

小田急線「成城学園前駅」から徒歩4分

